



稲賀繁美 著  
▶ 矢代幸雄  
美術家は時空を超えて  
1・10刊 四六判386頁 本体4500円  
ミネルヴァ書房

「ミネルヴァ書房の日本評伝選の待望の新刊。美術史家矢代幸雄(1890-1975)の国際的な人脈と文化外交、学術上の業績をまとめた評伝である。同シリーズで美術史家を扱ったものとしては2005年の『岡倉天心』(木下長宏著)に次ぐ刊行である。同書は「天心伝説」の解体により新しい岡倉像を提示したが、本書のアプローチもそれに近い。矢代幸雄は本人による回想録が充実し厚い層となり、読めば気になる逸話ばかりだが、限られた紙幅にぎゅっと凝縮された本評伝によってその人物像、芸術思想が驚くほど明確に、整理された状態で眼前に立ちのぼってきたのである。

矢代幸雄を知る美術史家は彼の人生を振り返り「幸せな出会いに満ちた一生」(59頁)であったと回想しているようだ。たとえば若き日にインドの詩人タゴールの通訳をしたこと、その縁で原三溪と知り合い、三溪の周辺にいた日本画家・美術史家とも交流できたこと。和辻哲郎ともここで知り合った。1921年に留学のため渡英すると大英博物館の東洋部長であったロレンス・ヒュートン、文学者のアーサー・ウェイリーらと交友した。美術品収集を始めた松方幸次郎と知り合ったのもこの頃である。本書はこれらの人物との邂逅と矢代の美術史修習に与えた影響を、流れるような文体で綴っている。そして同年の秋イタリヤに移動した矢代は終生の師となるバーナード・ベレンソンに出会うのである(この師弟関係については近年の出版に山梨絵美子・越川倫明編訳『美術の国の自由市民——矢代幸雄とバーナード・ベレンソンの往復書簡』(2019年)があり、本紙3405号に書評を寄せた)。

矢代がベレンソンの何に共鳴したかについての著者の分析には矢代の美術史観が端的に表れている。「科学的観察による犀利な様式的判断により、新たな学風を樹立したと同時に、また鋭敏な藝術的感受性を持ち合わせていた」(77頁)。

矢代には絵心があり、20代初めに水彩画で文展に入選したほどの腕前だった。「自ら絵筆を執る心得のある美術史研究者には、たんなる文献学者を超えた感性が横溢する。視覚藝術への親炙は、受け身の視覚体験の集積だけでは育まれまい」(10頁)と著者は児島喜久雄の名も挙げて本書の前半で指摘しているが、近年「美術史学史」という新しい学術領域への関心の高まりとともに日本の美術史学者の調査ノートが見直されている。例えば田中一松など卓越した画力で見せるものを驚かせた(科研19H01217、江村知子氏「日本美術の記録と評価についての研究——美術作品調査の保存活用」成果参照)。

さて、師の薫陶を受けて矢代が出版した英語論文『Van-dro Botticelli』の意義と評価については特に詳細な考察をおこなっており、本書の核心をなしている。矢代の論考を辛辣に批判したロジャー・フライへの反論については「片々たる証拠物件を頼りに過度な偽りの明快さを追求する代わりに、曖昧な事実は曖昧なままにしておくこそ、学問の良心ではないか——それが矢代の基本姿勢だった」(104頁)という著者の分析で平和的な着地を見ることができた。

4年に及ぶ留学からの帰国後は現在の東京文化財研究所の元となった帝國美術院付属研究所を設立する。写真資料を体系的に集めた同研究所着想の源となったウィット・ラ イフラーのこと、研究所の設計や什器選定などのエピソードも本書から臨場感をもって知ることができた。美術研究所で公職に就いていた頃の業績として本書は1936年ロンドン中国藝術展と中国美術工藝調査のための北京滞在に多くの頁を充てている。特に日本人の矢代に中国藝術展の講話が依頼された理由として著者が挙げた4点、すなわち、①中国絵画の古典性、②ギリシア・ローマ古典期と比較した仏教彫刻の造形的価値、③西欧の審美的基準や鑑識眼から見た中国美術④陶磁器や工芸品、装飾品の価値——を「説得力ある英語表現」で説明できるといふ見識の深さは、美術史家としての矢代幸雄の強みを的確に定義している。そして国策としての大陸進出と軌を一にした美術調査は「対支文化工

作」として美術研究所の責務となる。矢代がまとめた報告書を本書は細かく分析し、時局に合わせてつも拡張主義を批判する言説も同居している矢代自身の思想の揺らぎや、中国を相対視するための葛藤を徹底的に掘り下げる。太平洋戦争開戦後、矢代は美術研究所を退職、次いで東京美術学校教授も退官し私人として活動していく。戦中戦後の業績として『日本美術の特質』(1943年初版、1965年第2版)がある。この初版と第2版の差異についての詳細な検証には比較文化を専門とする著者の分析力がいかにたく発揮されている。「日本人論」への内在的批判に切り込んだ議論(186-187頁)にも学ぶところが多く、日本美術の国際的認知を目指す矢代が陥った「循環論法」(190頁)については、後段で「国策」としての日本古美術展を企画するにあたって「西欧的価値観」に立脚した日本美術の評価という論理矛盾として再検討されている(233-234頁)。占領下の美術行政において矢代は民間人としてGHQから任務を受け戦後日本の美術の民主化を目指した。著者は、この件を研究している佐藤香里氏を矢代研究の後事を託したいひとりと指名している。本書はとりわけ若い読者に向けられているという。博覧強記の著者がこれまで刊行した大部の著作の数々から学んできた評者の目で見ると、格調の高さはそのままに、より親しみやすい言葉づかいで綴られている。矢代の生涯を丁寧に追いつながら現代の美術史学や比較文化学の在り方についても踏み込んだ意見が述べられている本書は、何度読み返してもその都度新しい視点を「鳥瞰」によって提示してくれるはずだ。(筑波大学芸術系准教授)

# 鳥瞰する美術史

## 矢代幸雄の「全球的」人脈と視覚体験

### 林みちこ

「ミネルヴァ書房の日本評伝選の待望の新刊。美術史家矢代幸雄(1890-1975)の国際的な人脈と文化外交、学術上の業績をまとめた評伝である。同シリーズで美術史家を扱ったものとしては2005年の『岡倉天心』(木下長宏著)に次ぐ刊行である。同書は「天心伝説」の解体により新しい岡倉像を提示したが、本書のアプローチもそれに近い。矢代幸雄は本人による回想録が充実し厚い層となり、読めば気になる逸話ばかりだが、限られた紙幅にぎゅっと凝縮された本評伝によってその人物像、芸術思想が驚くほど明確に、整理された状態で眼前に立ちのぼってきたのである。

矢代幸雄を知る美術史家は彼の人生を振り返り「幸せな出会いに満ちた一生」(59頁)であったと回想しているようだ。たとえば若き日にインドの詩人タゴールの通訳をしたこと、その縁で原三溪と知り合い、三溪の周辺にいた日本画家・美術史家とも交流できたこと。和辻哲郎ともここで知り合った。1921年に留学のため渡英すると大英博物館の東洋部長であったロレンス・ヒュートン、文学者のアーサー・ウェイリーらと交友した。美術品収集を始めた松方幸次郎と知り合ったのもこの頃である。本書はこれらの人物との邂逅と矢代の美術史修習に与えた影響を、流れるような文体で綴っている。そして同年の秋イタリヤに移動した矢代は終生の師となるバーナード・ベレンソンに出会うのである(この師弟関係については近年の出版に山梨絵美子・越川倫明編訳『美術の国の自由市民——矢代幸雄とバーナード・ベレンソンの往復書簡』(2019年)があり、本紙3405号に書評を寄せた)。

矢代がベレンソンの何に共鳴したかについての著者の分析には矢代の美術史観が端的に表れている。「科学的観察による犀利な様式的判断により、新たな学風を樹立したと同時に、また鋭敏な藝術的感受性を持ち合わせていた」(77頁)。

矢代には絵心があり、20代初めに水彩画で文展に入選したほどの腕前だった。「自ら絵筆を執る心得のある美術史研究者には、たんなる文献学者を超えた感性が横溢する。視覚藝術への親炙は、受け身の視覚体験の集積だけでは育まれまい」(10頁)と著者は児島喜久雄の名も挙げて本書の前半で指摘しているが、近年「美術史学史」という新しい学術領域への関心の高まりとともに日本の美術史学者の調査ノートが見直されている。例えば田中一松など卓越した画力で見せるものを驚かせた(科研19H01217、江村知子氏「日本美術の記録と評価についての研究——美術作品調査の保存活用」成果参照)。

さて、師の薫陶を受けて矢代が出版した英語論文『Van-dro Botticelli』の意義と評価については特に詳細な考察をおこなっており、本書の核心をなしている。矢代の論考を辛辣に批判したロジャー・フライへの反論については「片々たる証拠物件を頼りに過度な偽りの明快さを追求する代わりに、曖昧な事実は曖昧なままにしておくこそ、学問の良心ではないか——それが矢代の基本姿勢だった」(104頁)という著者の分析で平和的な着地を見ることができた。